

白河屋の駒吉

《長沼》

幕末の頃、白河屋に駒吉という、年に似ず豪胆で、俠気に富んだ人がいた。喧嘩の仲裁役などをおかして出て、この地での顔役であった。陣屋でも一目おき、白河屋での賭博は黙許されていたという。

いつの日か、この駒吉、白河のある賭場に行き、もち前の豪胆さに物いわせ、この金を全部もらつて行くとかき集め、懐に入れ、ゆうゆうと引揚げた。賭場の面々捨て置き難しとその中の屈強の者三之助とかいうもの、その金を取りもどそうと後をつけて来た。見えかくれして好機をうかがつたが、ついに早坂にさしかかった。ここで駒吉、長沼領地内では事面倒になるのを恐れ、この者を一刀のもとに切り捨てて来たという、これが三之助坂と名つけられた所以である。

のちに、白河より駒吉捕縛の追手が、長沼に来たが、一応陣屋を通さねばならぬ定めのため、これら追手の人々、笠も取らず、陣屋に入り、捕縛を申し出たという。時の陣屋の役人、矢部嘉左エ門なる人、これを見、たちどころに「ここは水戸中納言の分家松平播磨守の領地である。笠は額につくり付けではあるまい。お取り召されい」とその非礼をなじった。取り手の人々、己が無礼を恥じて、そうそうに立ち去つたという。

取り手を見た人々、駒吉の難を恐れ、身をかくせと言いますすめたが、駒吉はその成り行きいかんと芳賀某氏の二階よりながめていたという。